ドクター通信 ①

一次医療から三次医療まで

市立総合病院院長　佐藤　時治郎

今回から毎月十六日号で、市立総合病院の医師による「ドクター通信」を連載します。外科系、内科系それぞれの担当医から、さまざまな出来事や話題などを紹介して頂くことにしています。どうぞご期待ください。

大館市立総合病院は、本来二次医療を担当すべき施設である。

しかし、市民は開業医の分担である一次医療から、大学などの専門病院が扱う三次医療までカバーできる病院として機能することを望んでいる。明治以来の長い伝統のある本院の歴史が、そういう風潮を生んだのであろう。現在の厳しい医療状況の下では、このような形の病院運営は正直に言って困難を極める問題である。

そのような現状を前提に、今、市立病院が抱えている問題の一端を述べ、市民各位のご協力を是非お願いしたいと考える次第である。まず、第一に救急外来の件であるが、本院の救急活動は全科を一人の当直医が窓口となって対応しており、同時に入院患者の急変にも応じなければならない。ところが、救急外来は事実上は夜間外来の様相を呈している。このため真に救急医療が必要な心筋梗塞、脳出血、交通外傷といった三次医療的な処置を一刻を争って必要とする患者の救命活動が阻害されているのである。不用不急の一般外来患者の自粛を是非お願いしたい。

次の問題は救急車や警察が送り込んでくる高度酩酊者の扱いの件である。連れてくる側の考えでは、もし重篤な身体障害を合併していた場合、あとで責任を追求されるから、まず医学的判断を仰いでから対応したいということなのであろうが、肝心の本人たちの中には診察を拒否したり、暴言や暴力をふるったりする者がいて、一人の酩酊者のために現場が混乱してしまうことがある。正月や花見時に複数の酩酊者を同時に相手にする当直医や看護婦の困惑は大変なものである。

さらに、頻度は少ないものの、市立病院を良い事に一方的、独善的な理屈を述べ、私利を計ろうとする問題患者の存在である。いわゆる「当たり屋」的な人物が来院したりすると、迷惑限り無いことになってしまう。こうした積極的な問題提起者ではないが、正当な医療報酬を支払わない患者も困りものである。

最近目立つ傾向として、病院ホールを遊園地と思って走り回って騒ぐ子供たちを、制止もせずに放任している若い母親たちがいる。例え相手が幼児でも、病院内では静粛にすべきことをしつけるべきである。また、病院構内を無料駐車場と考え長期無断駐車をしているのも、大人たちのモラルが問われる行為ではなかろうか。

色々注文をつけているようで恐縮であるが、病院当局としては患者中心の医療を目指して努力中であり、市民サイドの協力無くしては良い病院環境は生まれない。医療者側の姿勢の反省とともに、患者側にも「医道」と同じく「患者道」とも言うべきモラルが必要なことを訴え、この紙面を借りて広く市民の皆様に苦衷を述べた次第である。

次回からは内科系、外科系交替で、各科ごとのトピックスやコメントを紹介させて頂く。

第17回　大館市四季の観光写真展

今回の公募では、カラープリントの部四十六点、カラースライドの部八十三点、白黒の部十一点、計百四十点の作品がよせられました。

審査の結果、カラープリントの部から岩谷隆史さんが推選に選ばれました。岩谷さんの作品と、特選に選ばれた方々及び作品二点を紹介します。

推選

「祭囃し」

岩谷　隆史さん

（中神明町）

▽カラープリントの部

特選・「大文字おどり」

山田礼次郎さん（御成町）

▽カラースライドの部

特選・「燈籠流し」㊀

田村　栄さん（上代野）

特選・「ハチ公雪像」㊀

山田礼次郎さん（御成町）